

釋文亨字音義辨析

森 賀 一 惠

富山大学人文学部紀要第 60 号抜刷

2014年2月

釋文亨字音義辨析

森 賀 一 惠

一 はじめに

『説文解字』に見える「亨」(五篇下宮部)は「亨」、「享」、「烹」の古字である。言い換えれば、「亨」、「享」、「烹」は同源である。「亨」字段注の「其形、薦神作亨、亦作享、飪物作亨、亦作烹、易之元亨、則皆作亨、皆今字也(その形、神に薦めるは亨に作り、亦た享字に作る。物を飪るは亨に作り、亦た烹に作る。易の元亨は則ち皆な亨に作る。皆な今字なり)」という記述によれば、「亨」は「享」、「烹」に通用するが、「享」、「烹」はそれぞれ「薦神」、「飪物」の意の専用字であるということになる。現代漢語(普通話)では「亨」はhēng専用、「烹」はpēng専用、「享」はxiǎng専用と、はっきりと書き分けられているが、古くは「亨」は「享」、「烹」に通用していたようで、『廣韻』でも「亨」は脰(許庚切)小韻、磅(撫庚切)小韻、響(許兩切)小韻に見え、釋義はそれぞれ「通也」、「養也」、「獻也、祭也、臨也、向也、歆也」となっており、「享」、「烹」は「亨」の或體字扱いである。『羣經音辨』(以下、『音辨』)の「亨」音義解釋と『經典釋文』(以下、『釋文』)の「亨」の注音状況については、概述したことがある¹⁾が、本稿では、同源の「享」「烹」も併せて『釋文』での注音状況を調査し、『音辨』の「亨」の音義解釋の妥当性を検討したい。

二 『音辨』

『音辨』では「亨」は辨字同音異と辨字音清濁に見える。

卷二・辨字同音異「亨、嘉之會也(許庚切)、亨、淪也(普庚切、禮內饗掌割亨²⁾、又普孟切)、亨、獻也(許兩切)」。

卷六・辨字音聲濁「亨、獻也(呼兩切)、神受其獻曰亨(呼亮切)」。

「嘉之會」は『易』乾の卦辭「元亨利貞」の「亨」について文言傳が「亨者嘉之會也」と説くのに據る。『廣韻』の「通也」である。「淪」は煮るの意で、「普庚切」は『廣韻』の「撫庚切」

1) 森賀一恵 2013。

2) 『周禮』天官・内饗「凡宗廟之祭祀掌割亨之事」。

と同音、現代漢語では「烹」に作るものである。辨字同音異の「亨」の音義の解説は又音の「普孟切」を除けば『廣韻』と合う。辨字音聲濁は、現代漢語では「亨」に作る例のみを取り上げるが、『廣韻』と同音の「呼兩切」だけでなく、その去聲音を載せて、上去で意味が異なるかのような解釋をする。

以下、記述の便のため、必要な場合は、「許庚切」（曉母庚韻）の音を「亨」本音、「撫庚切」〔普庚切〕（滂母庚韻）などの音を「烹」本音、「許兩切」（曉母養韻）を「亨」本音と呼び、また、『音辨』の「普孟切」（滂母映韻）、「呼亮切」（曉母漾韻）は本音と聲調が異なるのみなので、それぞれ「烹」去聲音、「亨」去聲音と呼ぶ。

三 『釋文』

經文の用字は注音状況と関わりと考えられるので、『孟子』は『釋文』が取り上げていないが、阮元本十三經注疏の經文の三字の使用状況を確認しておく。「亨」は十三經すべてにわたって用いられているが、「烹」は『尚書』『穀梁傳』『論語』『孟子』『爾雅』『孝經』の經文では用いられず、「烹」に至っては『左傳』と『孟子』でしか用いられていない。専用字は本来ならば、その字の本音で読まれるはずであるから、「亨」ほど注音状況が複雑ではないだろうと考えられるので、まず、「烹」の意の専用字「烹」と「獻」の意の専用字「亨」の音をみる。

(一) 烹

「烹」は「亨」「享」に比べて後出の字であるためか、經注では最も使用頻度が低く、『釋文』でも「烹」の音は以下の4例のみである。

○禮記音義

曲禮上「能烹，普彭反，煮也」³⁾（滂母庚韻）

○左傳音義

哀公十六年傳「將烹，普庚反」（滂母庚韻）

○老子音義

德經「烹，普庚反，不當加火」（滂母庚韻）

○莊子音義

山木「烹之，普彭反，煮也」（滂母庚韻）

3) 『禮記』曲禮上經文「主人辭不能亨」の「能亨」に附されたものだが、阮元本の經文は「亨」に作る。

「烹」は「煑」の意の専用字であるから、音はいずれも「烹」本音である。

(二) 享

『釋文』では經注の34の「享」に音が附く。

○周易音義

損「用享，香兩反，下同，蜀才⁴⁾許庚反」(曉母養韻、曉母庚韻)

益「用享，香兩反，注同，王虞⁵⁾許庚反」(曉母養韻、曉母庚韻)

萃「孝享，香兩反」(曉母養韻)

困「享祀，許兩反，注同」(曉母養韻)

鼎「以享，香兩反，注享上帝同」(曉母養韻)

渙「享于，香兩反」(曉母養韻)

○毛詩音義

小雅・天保「孝享，許丈反，獻也」(曉母養韻)

小雅・信南山「享于，許兩反，徐許亮反，注及下同」(曉母養韻、曉母漾韻)

小雅・大田「以享，許兩反，徐又許亮反」(曉母養韻、曉母漾韻)

大雅・旱麓「以享，許丈反，徐許亮反」(曉母養韻、曉母漾韻)

周頌・我將「我享，許丈反，徐許亮反」(曉母養韻、曉母漾韻)

○周禮音義

天官・大宰「享先王，許兩反，劉音向，注享幣同」(曉母養韻、曉母漾韻)

天官・獸人「以享，許丈反，劉音向，後皆放此」(曉母養韻、曉母漾韻)

地官・鼓人「鬼享，許丈反，劉虛讓反，牛人職同」(曉母養韻、曉母漾韻)

地官・場人「享亦，許丈反，劉凡享皆音向，後放此」(曉母養韻、曉母漾韻)

春官・大宗伯「享之，許丈反，後不音者同」(曉母養韻)

○儀禮音義

覲禮「四享，四依注音三，享音香丈反，劉虛讓反」(曉母養韻、曉母漾韻)

4) 『釋文』序録・注解傳述人・易「蜀才注十卷(七録云，不詳何人，七志云，是王弼後人，案蜀李書云，姓范名長生，一名賢，隱居青城山，自號蜀才，李雄以為丞相)」。

5) 『釋文』序録・注解傳述人・易「王虞注十二卷(字世將，琅邪臨沂人，東晉荊州刺史，贈驃騎將軍，武陵康侯，七志、七録云十卷)」。

○禮記音義

曲禮上「弗享，許兩反」(曉母養韻)

曲禮下「曰享，許兩反，獻也，舊許亮反，後皆放此，不復重出」(曉母養韻、曉母漾韻)

聘義「享，許兩反，本又作饗」(曉母養韻)

○左傳音義

桓公元年傳「無享，許丈反」(曉母養韻)

桓公九年傳「享曹，許兩反」(曉母養韻)

僖公五年傳「吾享，興兩反」(曉母養韻)

成公十二年傳「享宴，許丈反，舊又許亮反，本亦作饗宴，音於見反，徐於顯反」(曉母養韻、曉母漾韻)

昭公元年傳「猶與賓客享之，許丈反，又普庚反」(曉母養韻、滂母庚韻)

昭公五年傳「享饗，並許丈反，鄭服皆以享為獻耳」(曉母養韻)

○穀梁傳音義

宣公八年「之享，許丈反」(曉母養韻)

昭公三十二年「不享，音許丈反」(曉母養韻)

哀公元年「享道，許丈反，注同」(曉母養韻)

○孝經

孝治章「祭則鬼享，許丈反」(曉母養韻)

喪親章「以鬼享之，許丈反，又作饗之」(曉母養韻)

○論語音義

八佾「不享，許丈反」(曉母養韻)

鄉黨「享，許丈反，注同」(曉母養韻)

○爾雅音義

釋詁「享，虛丈反，下注同」(曉母養韻)

「享」が「薦神」「獻」の意の専用字であることもあって、34例すべてまず「享」本音が示される。また、『穀梁傳』『孝經』『論語』『爾雅』の音義は「享」本音一音のみを載せる。周易音義の又音2例はいずれも「亨」本音だが、「享」を「亨」に讀ませるものである。また、左傳音義の又音は「烹」本音で、「享」を「烹」に讀ませるものである。その他の又音はすべて「享」去聲音で、毛詩音義の徐邈音、周禮音義、儀禮音義の劉昌宗音、禮記音義、左傳音義の舊音である。しかし、徐邈音は毛詩5例のうち4例、周禮音義、儀禮音義の劉昌宗音は6例のうち5例に附され、しかも、『周禮』地官・場人の釋文の記述からも劉昌宗が「享」には總じて「向」音(「享」去聲音)を附けることが明らかであるから、これらの去聲音は徐邈、劉昌宗の「享」音であっ

て、上聲の「亨」との意味の違いを示すものではなかったと考えられる。

(三) 亨

『釋文』では以下の通り、經注の56の「亨」に又音も含めれば71の音が附されている。音は5類で、曉母庚韻（「亨」本音）が17、曉母養韻（「亨」本音）が8、滂母庚韻（「烹」本音）が36、滂母映韻（「烹」去聲）が6、曉母漾韻（「亨」去聲）が2、滂母耕韻が2である。

○周易音義

乾「元亨，許庚反，卦德也，訓通也，餘放此」（曉母庚韻）

屯「亨于，許庚反」（曉母庚韻）

否「否亨，許庚反」（曉母庚韻）

大有「用亨，許庚反，通也，下同，衆家並香兩反，京云獻也，干云享宴也，姚云享祀也」（曉母庚韻、曉母養韻）

隨「用亨，許庚反，通也，陸許兩反，云祭也」（曉母庚韻、曉母養韻）

大畜「亨，許庚反」（曉母庚韻）

解「者亨，許庚反」（曉母庚韻）

升「用亨，許庚反，通也，馬鄭陸王肅許兩反，馬云祭也，鄭云獻也」（曉母庚韻、曉母養韻）

困「亨祀，許兩反，注同」（曉母養韻）

鼎「以木巽火亨，本又作烹同，普庚反，煮也，下及注聖人亨、大亨、亨飪、亨者竝同」（滂母庚韻）

繫辭下「能亨，許庚反」（曉母庚韻）

序卦「亨則，許庚反，鄭許兩反，徐音向同」（曉母庚韻、曉母養韻）

卦畧「亨在，許庚反」（曉母庚韻）

○毛詩音義

召南・采蘋「亨也，本又作烹同，普更反，煮也」（滂母庚韻）

檜風・匪風「亨魚，普庚反，注同，煮也」（滂母庚韻）

豳風・七月「亨葵，普庚反」（滂母庚韻）

小雅・楚茨「或亨，普庚反，飪之也，注同」（滂母庚韻）

小雅・信南山「納亨，普庚反」（滂母庚韻）

小雅・瓠葉「亨之，普庚反，熟也，注同」（滂母庚韻）

大雅・蕩「亨也，許庚反」（曉母庚韻）

○周禮音義

天官序官「割亨，威普庚反，劉普孟反」(滂母庚韻、滂母映韻)

天官序官「亨人，劉普庚反」(滂母庚韻)

天官·大宰「納亨，普庚反，注同，劉普孟反」(滂母庚韻、滂母映韻)

天官·內饗「割亨，普庚反，注及下同」(滂母庚韻)

天官·腊人「乃亨，普庚反」(滂母庚韻)

春官·大宗伯「亨牲，普庚反」(滂母庚韻)

春官·小宗伯「視亨，普庚反，劉普孟反」(滂母庚韻、滂母映韻)

秋官·大司寇「納亨，普庚反，劉普孟反，注同，下納亨放此」(滂母庚韻、滂母映韻)

秋官·掌客「亨，普庚反，劉普孟反」(滂母庚韻、滂母映韻)

○儀禮音義

士冠禮「曰亨，普庚反」(滂母庚韻)

鄉飲酒禮「亨于，普庚反，下注亨狗同，劉虛讓反」(滂母庚韻、曉母漾韻)

鄉射禮「亨于，普庚反，下注同」(滂母庚韻)

儀禮·燕禮「亨于，普庚反，注同」(滂母庚韻)

大射儀「亨肉，普庚反」(滂母庚韻)

聘禮「亨大，普庚反」(滂母庚韻)

公食大夫禮「兼亨，普庚反」(滂母庚韻)

公食大夫禮「亨于，普庚反」(滂母庚韻)

士虞禮「側亨，普庚反，劉虛兩反，注同」(滂母庚韻、曉母養韻)

特牲饋食禮「亨于，普庚反，注及下注不能亨、亨者同」(滂母庚韻)

少牢饋食禮「割亨，普庚反」(滂母庚韻)

○禮記音義

曲禮下「曰亨，許兩反，獻也，舊許亮反，後皆放此，不復重出」(曉母養韻、曉母漾韻)

禮運「亨，普併反，煮也，下合亨同」(滂母耕韻)

內則「亨，普彭反，煮也」(滂母庚韻)

樂記「孰亨，沈普衡反，徐許兩反」(滂母庚韻、曉母養韻)

祭義「亨孰，普彭反」(滂母庚韻)

祭統「亨，普彭反，徐普孟反」(滂母庚韻、滂母映韻)

鄉飲酒義「亨狗，普萌反」(滂母耕韻)

○左傳音義

襄公四年傳「而亨，普彭反，煮也」(滂母庚韻)

襄公九年傳「元亨，許庚反，下同」(曉母庚韻)

襄公二十六年傳「乃亨，普彭反」(滂母庚韻)

昭公四年傳「以亨，許庚反，注同，通也」(曉母庚韻)

昭公七年傳「元亨，許庚反，注元亨皆同」(曉母庚韻)

昭公二十年傳「以亨，普庚反，煮也」(滂母庚韻)

○公羊傳音義

莊公四年「亨乎，普庚反，注同，煮殺也」(滂母庚韻)

○論語音 公冶長「元亨，許庚反」(曉母庚韻)

○老子音義

道經「若亨，普庚反，殺煮也，簡文許庚反，河上公作饗，用也」(滂母庚韻、曉母庚韻)

周易音義13例のうち、11例はまず「亨」本音が示される。又音も含めた「亨」本音5例は「祭也」「獻也」などと解釋され「亨」に讀むもの、「烹」本音1例は「煮也」という解釋が示すように「烹」に讀ませようとするものである。毛詩音義7例中6例は「亨」を「烹」に讀むもので「烹」本音が附く。蕩の釋文は「文王……，焮然于中國」毛傳「焮然猶彭亨也」に附されたものであり、疊韻の連綿語「彭亨」の「亨」であるから「亨」本音が注される。周禮音義9例はすべて「烹^に」の意でまず「烹」本音が示されるが、うち5例に又音として劉昌宗の「烹」去聲音が附される。儀禮音義11例もまず「烹」本音が示される。うち2例は又音として劉昌宗の音も附され、いずれも「亨」に讀ませようとするものだが、1例は「亨」本音、もう1例は「亨」去聲音の反切である。禮記音義7例の注音状況は最も複雑である。曲禮下は「亨」を「亨」に讀む例で、禮記音義の「亨」の注音と同様にまず「亨」本音を示し舊讀の「亨」去聲音を附す。残りの6例はすべて「烹」に讀ませるものだが、禮運、鄉飲酒義の音は嚴密に言えば中古音では「烹」本音と同音ではない。しかし、『釋文』が引く諸家の音の中には庚韻、耕韻の同用例も見られる⁶⁾ことから、「烹」本音と異なる音として示されたものではないと思われる。また、又音の徐邈音は樂記の例では「亨」本音で「亨」に讀むことを示すと思われるが、祭統の例では「烹」去聲音で周禮音義の劉昌宗音と同じである。左傳音義6例のうち「煮」の意の3例には「烹」本音が、「元亨」の「亨」など「通」の意の3例には「亨」本音が附く。公羊傳音義、論語音義、老子音義各1例も「煮」の意なら「烹」本音、「通」の意なら「亨」本音が附く。

(四) まとめ

『釋文』の「烹」音4例はすべて「烹」本音のみが注される。「亨」音34例はすべてまず「亨」本音が示されるが、又音が附されるものがあり、又音の中には「亨」を「亨」、「烹」に讀ませる文の解釋の違いを示すものもあるが、字義や文意の解釋の違いとは関わりのない「亨」去聲

6) 坂井 1968 参照。

音もある。「亨」去聲音が現われるのは毛詩音義の徐邈音、周禮音義、儀禮音義の劉昌宗音、禮記音義、左傳音義の舊音に限られる。「亨」は「烹」、「享」に通用するので、「亨」56例の音注の中には「亨」本音の他に「烹」本音、「享」本音もあり、また「亨」、「烹」の去聲音もある。

「亨」本音は上聲、「烹」本音は平聲であるが、又音に去聲音が見えることは共通している。また、その去聲音は徐邈、劉昌宗の音あるいは舊音である。徐邈は『晉書』に傳があり、東晉隆安元年(397)に卒したことがわかる。劉昌宗は正史に傳はないが、徐邈や郭璞と同時代の人物だと考えられている⁷⁾。『梁書』沈約傳には、梁の武帝と周捨の四聲に關する有名な問答⁸⁾が見え、沈約が『四聲譜』を著した頃から漸く四聲が認識されたのだという説もある。それには反論もある⁹⁾が、魏晉は上古音から中古音の過渡期でもあり、聲調も中古音の四聲とは異なっていたであろうことは想像に難くない。『釋文』が引く晉の呂忱『字林』の音には平聲-去聲の混同、上聲-去聲の混同が多く見られるという¹⁰⁾。徐邈と劉昌宗の去聲音も本音との違いを示したものでなく、平聲、上聲との混同と捉えるべきだと思われる。

四 まとめ

『音辨』辨字同音異は『釋文』の音義の解説といえるものだが、「卷六の三門は必ずしも『釋文』に忠實でなく、『釋文』に何らかの據りどころを求めはするものの、二音二義の音義關係に無理にでも規則性を見出し、多音字の音義關係を系統的、體系的なものとして記述すべく、『釋文』の反切について時に牽強附會といわざるをえないような解釋をする」¹¹⁾。「亨」字についてもそれはあてはまる。

『音辨』卷二・辨字同音異の記述は『釋文』の「亨」の注音状況と概ね一致する。しかし、卷六・辨字音聲濁が「亨」本音と「亨」去聲音を意味の違いを反映するものと解釋するのは『釋文』に根據があるとはいえない。「亨」の釋文に見える「亨」去聲音は2例のみだが、いずれも首音でなく、1例は劉昌宗音、1例は舊音として附される又音であり、「亨」本音と「亨」去聲音の違いが意味の違いに對應するものとは考えられないからである。

7) 坂井 1964 の「劉昌宗の伝記について」参照。

8) 『梁書』沈約傳「帝問周捨曰、何謂四聲、捨曰、天子聖哲是也、然帝竟不遵用」。

9) 段玉裁は「多文梁武の如き平上去入の何物為るかを知らざるには非ず」(『六書音韻表』一・古四聲説) といひ、梁武帝ほどの教養ある人物が四聲が何であるかを知らなかったわけではなく、それを文の創作に應用することに賛同しなかったのだとする。

10) 坂井 1959 参照。

11) 森賀一恵 2013。

使用テキスト

阮元本十三經注疏
通志堂本『經典釋文』
四部叢刊本『羣經音辨』

引用文献

- 坂井健一 1959 「經典釈文所引《字林》音について」(もと『中国文化研究』2 號, 今『中国語学研究』(汲古書院 1995) に據る)
- 坂井健一 1964 「劉昌宗音義の声類上の特色」劉昌宗の伝記について(もと『内野博士還暦記念東洋学論集』, 今『中国語学研究』(汲古書院 1995) に據る)
- 坂井健一 1968 「韋昭・呂忱・向秀・王元規・何胤・崔譔音について」(もと『漢学研究』6 號, 今『中国語学研究』(汲古書院 1995) に據る)
- 森賀一恵 2013 「『羣經音辨』第六卷について」『富山大学人文学部紀要』第 59 号

本稿は平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「『羣經音辨』第六卷の研究」(課題番号 24520460) の成果の一部である。